



～年間聖句～「だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。」コリントの信徒への手紙Ⅱ 5章17節

心が寛容な人の中で育てられると、忍耐強くなる

思春期の生徒・子の難しさというのも、生徒指導・子育てのハードルを高めている要因です。教師も保護者もいろんな苦労があると思います。人間は他の動物に比べて、大人になるまでの期間が圧倒的に長いという特徴があります。生まれて離乳するまでが赤ちゃん、離乳から性成熟までが子ども、性成熟以降が大人と分けると、他の動物は、離乳から性成熟までが人間よりもかなり短いのです。もちろん寿命の違いはありますが、他の霊長類と比べても格段に人間の子ども時代は長いのです。

それはなぜか？ それは人間の脳がとても大きく、成長過程で脳と身体と同時に栄養を摂ることはできないので、まずは脳に優先して栄養を使い、ある程度脳が出来上がってから身体を大きくしていくスケジュールになっているからだというのです。

ところが最近の研究によると、脳が大体出来上がって体が大きくなったとしても、思春期の頃にはまだ「**脳の配線**」が大人並みになっていないことが分かったそうです。「脳の配線」とは、脳の中の情動や本能をつかさどる部分（大脳辺縁系や脳幹）と理性や人間的な状況判断をつかさどる部分（大脳皮質の中の前頭葉）の連携のことで、これが完成する、つまり衝動との折り合いを付けられるようになるには25歳頃までかかるそうです。

14歳ぐらいで身体は成熟して体力もあって、身の回りのことがひと通りできるようになったとしても、とっさの衝動を理性でコントロールしたり、様々な物事がある中で優先順位をつけて取り組んだりといったことは、まだできなかつたりするのです。「もう高校生なのに」のような感覚があったとしても、その言動に意表を突かれることがあります。「脳の配線」が出来上がっている教師・親からすれば、「脳の配線」が未完成である思春期の生徒・子との接し方が難しいのは無理もないのです。確かに私たちが思う感覚と誤差を感じることは多いと思います。

思春期は、前頭葉による抑制があまり効かないこともあり危険なこともあります。やりたいことがたくさんあって、ストッパーが利かずにやってしまう時期でもあります。しかし、衝動に突き動かされてでも実際に行動することで学びを得ることはあります。これを、私がいつも言う「**生産的失敗**」にする必要があるのです。失敗することに意味付けをしなくてはならないのです。つまり失敗した時に掴んだものはなさないということです。

私たち大人も失敗した経験はあるはずです。それでも今があるので、生徒・子に「失敗しても何とかなるよ」と伝えることはできます。生徒・子が、迷ってあちこちぶつかりながら生きている時に、「人の嫌がることは絶対にしてはならないことを指導する」という考えと合わせて、「今は成長過程で、いろいろ失敗はする時期である」という「**寛容さ**」も持たなくてはならないと思います。この「**寛容さ**」は「**忍耐強さ**」と大きな相関関係があります。一般的に「**忍耐強さ**」は、厳しくすることで育まれると想像する人が多いようです。確かにそういう状況で育まれる部分はあると思います。でも、自分自身を振り返ってみても、たったひとりで歯を食いしばってがんばり抜いたということはないでしょう。必ず、苦しいときに、誰かが話を聴いてくれたり、相談にのってくれたりしているはず。隣の人の笑顔だけでも忍耐は継続されます。「**忍耐強さ**」の要因は、「**個人のパーソナリティー9%、その人の周りの人的環境91%**」という研究結果もあります。だから、この「**忍耐強さ**」を継続させるのは、その人の周りにいる人たちのかわりや思いやりなのです。「**忍耐強さ**」が継続されなければ「**成果**」は得られません。「**忍耐強さ**」を継続させるには、「**心が寛容な人の中で育てる**」ということになります。